日本イスパニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第20号（2013年9月11日）/ Núm. 20 (11 de septiembre de 2013)

事 務 局
〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10
ｱｰﾊﾞﾝ大塚 3F　（株）ガリレオ
学会業務情報化センター 東京オフィス内
Tel:03-5907-3750　Fax:03-5907-6364
e-mail:g004esp.mng@galileo.co.jp
(http://wwwsoc.nii.ac.jp/ajh/)

広報委員会編集部
〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1
関西外国語大学　外国語学部
田尻陽一研究室
Tel: 072-805-2801(代表)
e-mail: y-tajiri@kansaigaidai.ac.jp

目　次

【巻 頭 言】林屋永吉「60 数年前を振り返って」…… 2
【エッセイ】
1．西川喬「スペインで日本語を教えること」…… 3
2．角田哲康「いまどきのスペイン語」…… 4
3．渡辺雅哉「¿In vino veritas? —— ヘレスの 1936 年夏」…… 5
【書　評】
1．ロベルト・ボラーニョ『２６６６』
野谷文昭、内田兆史、久野量一訳、白水社（柳原孝敦）…… 6
2．アルベルト・ルイ=サンチェス『空気の名前』
斎藤文子訳、白水社（野谷文昭）…… 8
3．ビセンテ・ウイドブロ『マニフェスト　—ダダからクレアシオニスムへ』
鼓宗訳、関西大学東西学術研究所（坂田幸子）…… 9
4．寺尾隆吉『魔術的リアリズム　20 世紀のラテンアメリカ小説』
水声社（井尻直志）…… 10
5．セサル・アイラ『わたしの物語』柳原孝敦訳、松籟社（松本健二）…… 11
6．ホセ・デ・エスプロンセーダ『サラマンカの学生』
佐竹謙一訳、岩波文庫（木下登）…… 12
7．小阪知弘『ガルシア・ロルカと三島由紀夫　二十世紀　二つの伝説』
国書刊行会（清水憲男）…… 13
8．マルセリーノ・アヒース・ビリャベルデ『聖なるものをめぐる哲学
ミルチャ・エリアーデ』平田 渡訳、関西大学出版部（田尻陽一）…… 14
9．María Jesús Zamora Calvo (editora), *Japón y España: Acercamientos y Desencuentros (siglos XVI y XVII)*, SATORI, Gijón, 2012.
（成田瑞穂）…… 15
【海外学会報告】
1．今井洋子：XIX　Sociedad Española de Literatura General y Comparada…… 16
2．Analía Vitale: 24to CONGRESO SOBRE ESPAÑOL EN LOS EE. UU. Y EL 9no CONGRESO SOBRE EL ESPAÑOL EN CONTACTO CON OTRAS LENGUAS…… 17
3．Fernando Blanco Cendón：XLVIII CONGRESO INTERNACIONAL DE LA AEPE…… 18
【国内の学会案内】XXVI Congreso CANELA 2014…… 19
【新刊案内】(2012. 4〜2013. 5)…… 21
【『HISPANICA』編集委員会より】…… 23
【編集後記】…… 24

【巻頭言】

60数年前を振り返って

林屋　永吉

わたしが最初のスペイン滞在から帰ってきたのは、1946 年の３月末だった。欧州大戦が世界大戦となって、帰国できなくなった在欧州の日本人外交官および民間駐在員全員の、占領軍司令部からの命による総引き揚げだったのだが、５年振りに見る祖国の姿は誠に痛ましい限りだった。

早速出頭した外務省は、田村町の街角のビルの４階に、「中央終戦連絡事務局」の表札を掲げて、ほぼ全国に駐屯する占領軍と各府県庁の間に入って、占領行政の円滑化を図っていた。引き揚げてきた元留学生達は皆、本部か地方支部に配属され、わたしは海兵隊の駐屯する佐世保、京都、東京の三ケ所に合わせて約６年間過ごしたが、どこの司令部でもスペイン語を話したがる幹部将校と出会い、それが随分仕事にも役立ち有難かった。

そして京都では、事務局の本来の仕事とは関係なかったが、勤務２年目の 1949 年が丁度サン・フランシスコ・ハビエルの来日 400 年に当たるので、スペインから聖者の聖遺物を持って巡礼団が来日し、京都の大聖堂でミサを捧げるということが分かった。それで早速委員会を設けて歓迎しようということになり、会長は南蛮研究の大御所とされる新村出先生にお願いし、委員には歴史学の原隨園先生、スペイン絵画研究の須田国太郎画伯、京都織物美術の龍村謙会長、それに大阪外語の佐藤、国沢、アルバレスの三先生らに加わっていただいた。そして歓迎会を学友会館で開き、同時に須田先生のエル・グレコの模写の展示と講演をも行うことになった。

当日は、一行に同行された在日スペイン大使館のオヘダ大使御夫妻と、丁度調達庁の京都支局長として着任した許りの元駐スペイン公使館の三浦参事官も参加され、大盛会であった。その際、是非この機会に日西文化協会を作ろうという話が出て、一同が賛成し、準備を始めることになったが、わたしはその２か月後に本部へ移ることになって、事後を委員の一人、大西芳雄元京大教授・弁護士にお願いして離京したが、同氏からその後まもなく「財団法人日西文化協会寄付行為」が送られてきて、協会が無事できたことが分かり、安心した。

本部では木村四郎七局長の下で、連絡局調整課の末席を汚していたが、司令部内にもまたスペイン語好きの高官がいて、結構忙しかった。然し、私生活ではかねてから噂で聞いていた外務省のスペイン語の先輩や大学の先生方のお話を聞けたのがうれしかった。初めてお会いした井沢実さんにはお宅で膨大な蔵書と御著書を見せていただき、大いに刺激された。留学生試験の試験官だった臼井健氏をはじめ、片岡孝三郎、古川武司、横山信一、新谷英一郎、竹内勝重、兼田春重、谷新太郎といった、留学中に度々お名前を聞いた先輩諸氏と語り合うのが楽しかった。また既に立派な翻訳書や研究書を出しておられた東京外語の永田寛定先生や笠井鎮夫先生、そして会田由先生からもとても親しくしていただいた。

その内に出版社の人々ともお付き合いができて、岩波書店の雑誌に、わたしがスペインを出るころ非常に話題となっていた「ドン・フアン劇」について書いたところ、今度は同社から出たばかりの『ドン・キホーテ』の日本語訳の書評を依頼してきた。これは誠に見事な訳文で、詩文の訳などは絶妙だったので、流石は永田寛定先生の訳だと感服し、若輩の執筆をお詫びする手紙を先生にお出ししておいたところ、ご丁重な御返書を頂き恐縮した。

そうこうしている頃、名古屋大学の新村猛教授からスペイン文学史の集中講義を依頼され、外務省へ手続きをしていただいて、５日間名古屋に滞在し、初めて教壇に立った。当時はま

だ古ぼけた陸軍の兵舎の仮教室で、風が吹く度にカタカタと音がしたのが印象に強く残っている。どれほど生徒が理解してくれたかと心配だったが、それから暫くして大学から採点のために送ってきた学生たちのリポートを読んで、流石は、と安心した。

それから暫く経った1952年の3月、外交再開を前にして、やがて在メキシコ大使館となるリエゾン・オフィス開設のために、所長の千葉皓参事官御夫妻などと共に、初めて家族共々飛行機に乗って出国した。それから既に60年も経過したことになるが、今もその頃が懐かしい。

（はやしや・えいきち　元在スペイン日本大使）

【エッセイ１】

スペインで日本語を教えること

西川　喬

スペインのアルカラ大学と神戸市外国語大学は1994年に教育交流協定を結んだ。私はその翌年に最初の交換教員として、スペインのアルカラ大学に派遣され、１年間日本語教育に従事した。その後、何度かアルカラ大学に派遣された。日本では大学でスペイン語を教えていたが、スペインで日本語を教えることになるとは、予想だにしないことであった。苦労もあったが、日本では得られないさまざまな経験もすることができた。

アルカラ大学は1995年に文学部の中に初めて日本語講座を開設した。私が派遣されたのは、この講座の科目を担当するためである。開設１年目だったので、授業は「初級レベル」だけで、学生は初めて日本語を習う人たちが対象で、週に２コマ、教えることになった。大多数は全く日本語が初めてだった。文学部だけでなく、法学部や経済学部からも受講が可能で、17名が登録したが、実際に授業に出てきたのは、14名だった。当時の出席表を眺めていると、この14名はほとんどが全出席だった。一期生でもあり、少人数だったので、名前と顔をよく覚えている。

最初の授業は、日本語の発音を少し紹介してから、それぞれの学生に日本語学習の動機を尋ねてみた。多く学生は漠然とした日本への興味があるとのことだったが、中には日本のアニメと漫画がおもしろくて、日本語を勉強したくなったという学生もいたのには驚いた。私はそのような分野にはまったくといっていいくらい知識がなかったが、あとでスペインの他の大学で日本語を教えている先生方と話したとき、そこの大学でもアニメと漫画は日本語学習の動機のひとつだと聞かされて、日本のこうしたサブカルチャーがスペインの若者たちの間に少なからず浸透していることをあらためて認識させられた。

さて、学生たちの学習態度はきわめて熱心なものだった。教材は初めのうちは市販の教科書を使ったが、文法体系がうまくまとめられていなかったのと、最初から「ひらがな」や「かたかな」を学ぶようになっていたので、使いにくかった。そこで、ローマ字で書いた簡単な文法を自分でまとめて、プリントして副教材として使った。学生たちの希望は極めて明確で、「日本語を話したい」につきた。従って、まずはローマ字で書いた日常会話文を使用しながら、少しずつ文法を教えていき、やがてひらがなや簡単な漢字などを学習した。

さて、その後もアルカラ大学との交流は続き、派遣教員による日本語教育も続けられた。1998年に再びアルカラ大学に派遣されたときは、すでに体制もかなり整っていて、外国語セ

ンターが出来上がっていた。ロシア語、ドイツ語、ハンガリー語、アラビア語なども整備されていたし、日本語も初級、中級、上級にクラスが増えていた。中級クラスでは、私が最初に教えた学生が何人かいたが、ずいぶん語学力がついていた。また、別のところで日本語を学習してきた受講生もいたが、この頃はまだ適当な市販の日本語テキストが見つからなかったので、プリントしたものを何種類か使用して、最終的にテキストを決定した。また、このクラスではそれぞれの学生の学力の差も大きくなり、それを調整するのに苦労した。

この数年後に派遣されたときには、日本語コースはすっかり整っていた。初級、中級、上級、最上級というクラスが編成されていた。最上級クラスでは本格的な講読とスペイン語を日本語にする作文の授業があった。購読に関しては、文学作品や新聞などから教材を探したが、スペイン人学生にとってやはり漢字が難しいのだろうなという印象を受けた。作文に関しては、よく「この日本語は正しいか」という質問を受けたが、ネイティブとして日本語の文をチェックするということが意外と難しい作業であることを知った。例えば、「私は来年東京に住みます」という文の可否を問われたことがあったが、文法上間違いではないだろうが、文脈を考えなければ何とも舌っ足らずな表現である。「タバコを吸いますか」、「タバコは吸いますか」、「タバコ、吸いますか」の違いを質問され、うまく答えられなかったことは今でも気にかかっている。

さて、スペインにおいて公的機関での日本語教授は、1975 年にマドリード国立語学学校（現公立語学学校）が最初であるが、その後はマドリード自治大学やバルセローナ自治大学などでも教えられることになった。アルカラ大学はこうした「日本語ブーム」に乗って日本語コースを設けたが、上記の大学のように「専攻コース」になることはなかった。

2010 年にはマドリード日本文化センターが開設され、また日本語を教える機関もかなり増加した。マドリードとバルセローナで実施される日本語能力試験には 1000 人ほどの人が受験したと聞く。こうしたことから、スペインにおける日本語学習はもはや「日本ブーム」の域を脱していると言えよう。

私見ではあるが、日本人がスペイン語を学習するより、スペイン人が日本語を学習するほうがはるかに多くの困難にぶつかるような気がする。漢字を含む日本語の複雑な文字体系を学習しなければならないのが原因と思われるが、スペイン人学習者の日本語に対する強い学習意欲と興味は賞賛に値する。これからもスペインにおける日本語教育がさらに進むことを願ってやまない。

（にしかわ・たかし　神戸市外国語大学名誉教授）

【エッセイ２】

いまどきのスペイン語

角田　哲康

新年度まもない４月 26 日、歌手の今井翼さんが本学部１年生対象の「スペイン語Ｉ」の特別講師として教壇に立った。ジャニーズ事務所所属の歌手が大学講師を務めるのは初めてのことで、当日は 400 人を越える受講者で教室は熱気に包まれた。

今回の特別講師就任は、平成 23 年度前期の NHK テレビ講座「テレビでスペイン語」で、今井翼さんと私が共演したことがきっかけだった。そこでは、スペイン語初心者の方だけで

はなく、どちらかと言えば中級者にも楽しんで学んでもらえるように心がけた。ところが番組を担当して初めて分かったのだが、視聴者にはリピーターだけでなく高校生が想像以上に多く、これには少し驚いた。というのは、番組期間中、今日の大学教員のつとめとして避けては通れない入試広報担当として全国の高校を訪れていた。行く先々で、スペイン語を独学で学んでいる高校生に出会い、度々番組のことが話題となった（もちろん今井翼さんの影響が大きい）。いまどきの高校生の学びのスタイルに直接触れる良い機会であった。

生まれた時から携帯電話に触れている高校生世代。まさに「指先から学ぶ」ことが当たり前。その影響からか、感覚を重視する彼らの学び方はスペイン語学習にも少なからず見てとれる。画面という限られたスペースの中に、視覚的に訴える文字構成、そしてアニメーション効果と音声。紙に書かれた動かない文字よりも、踊る文字説明に反応する彼ら。「育脳メソッド視聴覚教材」がもてはやされる今日。言語教育が専門ではない私がスペイン語教育を大学で担っているという現実を踏まえ、画面を通して見えない対象にスペイン語を教えたことは、本当に貴重な体験であった。

4月26日に話は戻るが、今井翼さんもPower Pointを用いながら、さらに映像を組み合わせるスタイルの講義を行った。すでに4年以上にわたってスペイン語を学んでおり、年に数回はスペインを訪れているとのこと。NHKのスペイン語番組への出演も本人たっての希望だったとか。講義は動詞の規則変化から始まり、「翼先生」自身が選んだ「覚えにくい不規則変化動詞とすぐに役立つ不規則変化動詞」の説明へと進む。不規則変化のポイントがうまく映像効果を伴ってまとめられており、学生たちには大好評だった。そして何よりも際だったのが、翼先生の話術。普段積極的にノートを取るとは言えない学生たちが、自発的にノートを取っているのが印象的だった。芸能人のトークがなめらかなのは当たり前のことなのかもしれないが、それが今日の教員に求められているタレントの一つであることを再認識する機会でもあった。

（すみた・てつやす　日本大学国際関係学部教授）

【エッセイ３】

¿In vino veritas?　―― ヘレスの1936年夏

渡辺　雅哉

遡ること10年前の2003年、フランコ独裁が封印した地元の過去に光を当てる組織が、カディス県のヘレス・デ・ラ・フロンテーラに誕生した。その名もグループ「ヘレスは思い出す（Jerez Recuerda）」により、1936年7月19日の軍事クーデタ以後、フランコ派の手にかかって当地で虐殺された「アカども」の正確な氏名、または苗字が続々と判明しつつある。1963年に獄中に散った作家のマヌエル・モレノ・バランコを加えれば、これまでに少なくとも382人の死亡の事実が確認されている。手探りで始められた作業は、むろんまだ道半ば。シェリー酒の生産で潤うアンダルシアの地方都市における内戦の犠牲者は、一説には1,200人にも上るとみられ、未曾有の悲劇の実情は今後さらに明らかにされていくにちがいない（Asociación para la Recuperación de la Justicia y la Memoria Histórica “Jerez Recuerda”, *Las cifras de la represión en Jerez de la Frontera tras el golpe militar de 1936: Una*

aproximación, Jerez, 2009, 59p.)。

無慈悲な軍事行動の裏には、人民戦線が実施しつつあった農地改革への南スペインの大地主たちの脅えがあった。ヘレスの第２共和制が瞬時に破壊された直後、ドメックやゴンサーレス・ビアスらシェリー酒醸造業者が反乱軍への支援を申し出たことは、そのありふれた、だが確かな証左の１つである。ドメックが所有する、いかにもヘレスの「名士」に似つかわしい馬場は、1936 年夏には「アカども」の屠殺場と化した。「ヘレスは思い出す」が断じるように、彼の地にそもそも「内戦」はなかった。あったのは、19 世紀後半以来の労使間の、こちらの方は紛れもない「戦争」を強引に終結させた「殺戮」である。それまで、ヘレスは南スペインの労使対立の主な舞台の１つであり続けたのだった。持てる者の倨傲と持たざる者の悲惨を描き、「アンダルシアの農業問題」の根深さを世論に喚起したビセンテ・ブラスコ・イバーニェスの小説『ラ・ボデーガ』(1905 年) も、他ならぬヘレスの街頭に「アナーキー万歳！」の叫びがこだました 19 世紀末の騒擾に取材した作品だった。

ラジオ・ヘレスを通じて、農地改革の責任者アドルフォ・バスケス・ウマスケが大地主たちに「忍従」を求めたのは６月９日である（*Boletín del IRA*, núm.48,VI- 1936.)。それからちょうど 40 日後、同局は反乱軍の掌中に帰す。そして、そのマイクを前に得意の長広舌を披露し、「アカども」の「根絶」・「追放」を呼びかけたのが、ホセ・マリーア・ペマンだった。カディスの詩人が渇望したとおりの無残な死を強いられた人間たちのなかには、アントニオ・オリベール・ビリャヌエーバとセバスティアン・オリーバ・ヒメーネスが含まれる。流血回避の一念から、オリベール・ビリャヌエーバは地元の労組への武器の引き渡しを拒み、決起したサルバドール・デ・アリソン少佐に行政の権限を委譲した。「良識」があだとなって、この第２共和制最後のヘレス市長は自身の墓穴を掘らされる破目になる。もう一方のオリーバ・ヒメーネスは、丸裸のまま反乱軍と対峙する破目に陥った農業労働者たちの牽引役として、長らくヘレスの階級「戦争」の陣頭指揮に当たってきた古参のサンディカリストである。つい最近まで、このオリーバ・ヒメーネスはセビーリャで銃殺されたものと考えられていた。筋金入りの活動家の最期をも、フランシスコ・フランコ将軍のスペインは忘却の霞に包み込んでしまったのである。アンダルシアの「逸品」が醸される酒樽の底には、そんなスペインの澱がよどんでいる。

（わたなべ・まさや　早稲田大学非常勤講師）

【書評１】

ロベルト・ボラーニョ『２６６６』(野谷文昭、内田兆史、久野量一訳、白水社、2012)

柳原　孝敦

メガ・ノベルという語が採用されることがある。ロベルト・ボラーニョ『２６６６』はそれだけ長大な小説だ。日本語訳にして２段組み 850 ページ、判型も大きい（四六判ではなく、Ａ５判）ので堂々たるヴォリュームだ。作家自身が５部構成の各部を独立して出版するよう遺言しただけのことはある。ただし、分冊を命じたのはこれを通勤電車内で読む人の腕力を考慮してのことではなく、あくまでも遺される家族を慮ってのこと。内容の有機的な関連性を考えると、編者のイグナシオ・エチェバリアが判断したように、確かにまとまった一編なのである。

まず「批評家たちの部」では、謎のドイツ人作家ベンノ・フォン・アルチンボルディに魅せられた、それぞれイギリス、フランス、イタリア、スペインの研究者４人の交友が描かれ、彼らが作家の謎のメキシコ旅行を追って旅立つ経緯が語られている。そんな彼らを国境の町サンタテレサで迎えた人物のひとりが、「アマルフィターノの部」の主人公だ。チリ人哲学教師で当地の大学で教鞭を執る彼の、スペイン人妻との出会いと別れ、引き取った娘との関係が描かれ、作家本人の人生を忍ばせる。第３の「フェイトの部」ではニューヨークの黒人雑誌記者がボクシングの取材のためにサンタテレサを訪れている。フワレス市をモデルにしたこの米墨国境の町では、おりしも連続女性殺人事件が起きており、登場人物たちが少しずつこの事件の存在に気づいていく仕方が、不穏だ。そんな不穏な空気を一気に解放したのが、続く「犯罪の部」だ。ここではサンタテレサの女性連続暴行殺害事件の 100 を超える事例が、その捜査の過程とともに詳述される。鬱勃として辛い 250 ページだ。そして最後の「アルチンボルディの部」では、ドイツ人ハンス・ライターが作家アルチンボルディとなり、80 歳も超えてからサンタテレサに旅立つことになった経緯が語られる。最後の２ページは、一編の映画の夢のようなエンディングを見ている気分にさせる。広大な時間と空間の旅の終わりをやさしく告げているのだ。

ラテンアメリカ研究者としては、小説中の圧巻、第４部に注意を促すべきかもしれない。被害者の多くがマキラドーラと呼ばれる多国籍企業の生産工場に勤務する若年労働者であるという現実において、モデルとなったフワレス市の連続女性殺人同様、グローバル化時代の影を思わせる陰惨な事件が、麻薬密売マフィアのボスと警察との癒着、パーティ企画を装った売春組織の存在などへの示唆とともにつぶさに語られていく。凄惨な事件の数々が読者を暗澹たる気分にさせるけれども、ここに世界を読み解くための鍵と、小説を楽しむための伏線が数多くちりばめられているのだから、諦めずに読み進めた方がいい。鬱陶しいだけではない逸話も多く挿入されている。

文学研究者としては、「批評家たちの部」のアルチンボルディ研究者たちにたっぷりと感情移入できるし、なにより最終第５部に興奮せずにはいられない。私は、たとえば、ボラーニョ作品における「書くこと」をめぐるメタ小説的記述に常々興味を覚えてきたが、そんな観点から見れば、ハンス・ライターが創作に目覚めていく過程は、ことのほか興味深く感じられる。戦争で負傷して自身の師団からはぐれ、たどり着いたソ連の村コステキノで、ボリス・アンスキーの手記を見つけたハンスが、やがてそこから物語を紡いでいくのだと説明すれば、『ドン・キホーテ』的ではないかと興奮もしようが、アンスキーがかつてＳＦ作家エフライン・イワノフのゴーストライターであったことを考えると、話はますます重層的になるし、何よりその手記が、ナチスによるユダヤ人虐殺の痕跡らしいものとともに見いだされたとなると、『ドン・キホーテ』というよりは『アンネの日記』を思わせる、きわめて 20 世紀的かつ現代的な記憶の問題に接続されそうだ。第１部では、いかにも文学理論の見地から論議を呼ぶ作品のように形容されるアルチンボルディの小説の内容が、つまびらかにされているわけではないのだが、苦労してドイツ語を獲得したらしい多言語状況下のハンス・ライターは、ホロコーストの記憶が多分に反映された作品で小説家アルチンボルディとなり、やがてノーベル賞候補となるのだ。

以後、『ドン・キホーテ』や『百年の孤独』に加えて『２６６６』を読まない者にスペイン語文学の研究者を自任して欲しくないと私は思う。それほどの重要作品だ。

（やなぎはら・たかあつ　東京外国語大学教授）

【書評２】

アルベルト・ルイ=サンチェス『空気の名前』（斎藤文子訳、白水社、2013 年）

野谷　文昭

『空気の名前』は、日本では初紹介となるメキシコの作家アルベルト・ルイ=サンチェスの処女小説であり、モガドールを舞台とする五部作の第一作でもある。モロッコの大西洋に臨む港湾都市エッサウイラの古称がモガドールで、この名が用いられているところから、物語の時代が現代ではないことが想像されるものの、断定はできない。そのため物語は神話性を帯び、読者はあたかも『千夜一夜物語』に耳を傾けているような印象を受けるだろう。あるいは官能性を別にすれば、ボルヘスの短篇に通じるところもある。たとえば、「もし世界を表象する文字を選び取ることができるなら、世界全体は胡桃のなかに収めることができる」というモガドールの格言なるものを引くところなど、ボルヘスを彷彿させる。

物語の主人公はファトマという名の少女で、彼女には両親の記憶がない。両親は海で消息を絶ったと言われ、そのため祖母アイシャと暮らしている。こうした設定も物語性を強めている。あるとき彼女の裡に変化が萌す。祖母がそれに気づき、その「邪（よこしま）な力」の正体を知ろうとカードで占う。ここで物語のキーワードが予言のように現れる。「鳥」、「螺旋」、「欲望」。彼女は内面の旅を始めていたのだ。

語り手はその変化を指すのに「性の目覚め」というような直截的な表現は決して使わない。むしろ迂回するために、様々なメタファーを用いている。それが詩的文体を生み、またこの螺旋を描くような迂回によって引き伸ばされる快楽がこの夢幻的で官能的な作品の大きな魅力となっている。そもそもここではモガドールという町そのものが官能的な女体に喩えられているのである。したがって、西欧的意識とも考えられる語り手＝男性の欲望が、非西欧＝女性が提供する肉体の快楽を享受するという構造があるならば、そこにオリエンタリズムの影を見出すことも不可能ではない。だが、「水平なオリエンタリズム」という言葉を使う著者は、その危険性があることを十分自覚しているようだ。イスラーム圏では女性は性を大っぴらには語れない。少女の性の目覚めの感覚を彼女に代わって語ることは、二重の他者表象となるだろう。男たちはファトマの変化に振り回されるばかりだ。

女性の浴場を描いた場面も、著者がイスラームの外部の人間だからできたことだろう。もちろん実際に見たわけではなく、土地の女性たちから聞いたことを想像力によってイメージ化した産物であることは言うまでもない。そのためか、ここからはときおりドキュメンタリー作家に似た著者の声が聞こえる。それでも、アングル描く「トルコ風呂」とはおよそ異なるリアルかつ幻想的な浴場がそこにはある。そしてここでファトマは伝説の女性カディヤに会うのだ。

ファトマが主人公であるとすれば、カディヤは副主人公と言えるだろう。彼女は遊牧民の出身で、悲惨な過去を背負っている。それは小説の中のもう一つの物語となっている。春をひさぐ身となった彼女にファトマは熱を上げ、男たちがファトマに翻弄される一方、ファトマはカディヤの虜になってしまう。だが、その性の形を語り手は同性愛とは決して呼ばず、性の匂いを孕んだ空気について語るばかりだ。そのこともまた、この小説にミステリアスな性格を与えている。

原題では「名前」は単数ではなく複数である。この複数性、螺旋といった要素に、世界をバロック的に捉えようとする著者の特徴が垣間見られるが、それを表現しうるのにうってつけの場所を彼は見つけた。それがモガドールである。カルペンティエールにとってハバナが

バロック都市なら、ルイ=サンチェスにとってはモガドールこそバロック都市なのだ。著者は早くも処女小説で、この町を「目で聞き、指と耳で見て、嗅覚で味わ」っている。ファトマは一言もしゃべらないが、実際、色彩、音、触覚など五感が感じる以上のことが本書から伝わってくる。

（のや・あきふみ　東京大学名誉教授）

【書評３】

ビセンテ・ウイドブロ『マニフェスト　―ダダからクレアシオニスムへ』
（鼓 宗訳、関西大学東西学術研究所、2013 年）

坂田　幸子

本書は 1925 年にパリで出版された、チリ出身の前衛詩人ビセンテ・ウイドブロ（1893-1948）による宣言集 *Manifestes* の全訳である（原著がフランス語であるため、邦訳タイトルもフランス語のカナ表記が採用されている。またウイドブロが主導した運動名も同様に、クレアシオニスムという表記となっている）。

ウイドブロは 1916 年に渡欧してパリに居を定め、その後、一時帰国やマドリードに短期滞在した期間などを除けば、1930 年代初頭までかの地を本拠とする。その間、ツァラやルヴェルディのような詩人たち、あるいはピカソやデュシャンといった芸術家たちと交わり切磋琢磨するなか、フランス語とスペイン語の双方を用いて創作活動を行った。スペイン語圏の詩人が前衛文学運動の懐に飛び込み、自らの美学と主張を掲げて対等の立場で渡りあった稀有な例であると言えよう。

ウイドブロの作品と詩論はこれまで断片的に翻訳・紹介されてきたが、宣言集がこうして全訳されたことはまことに意義深い。本書はもちろん、渡欧以前からウイドブロが一貫して唱えてきたクレアシオニスムの美学　―外部世界から独立した、固有の生命をそなえた驚異的なるものの創造―　を主張したものではあるが、それよりもむしろ、訳者解説を引くならば、「シュルレアリスムの理論への反駁という色彩が濃い」、言い換えるならばこの宣言集は、シュルレアリスムを攻撃・否定することによってクレアシオニスムの理論を主張しようとしたものだと言えよう。なにしろこの宣言集がパリで出版された 1925 年といえば、ブルトンのシュルレアリスム宣言発表の翌年にあたる。ウイドブロはブルトンへのライバル意識をむきだしにし、みずからの優越性を強く主張する。いわく、優れた詩は夢と自動記述ではなく、理性による統制から生まれる、と。そして詩作に必要な知的作用が極度に高められた状態のことを、彼は超意識 superconscience あるいは詩的譫妄 délire poétique と呼ぶのだ。譫妄は、万人に許された夢とは異なり、詩人にのみ許された領域なのである。

ブルトンとシュルレアリスム以外では、未来主義、ウルトライスモなどの前衛運動やルヴェルディのような詩人に対しても鋭い批判や皮肉が向けられる一方、ポール・エリュアールは高い評価を与えられている。

鼓宗氏による翻訳では、底本となった Cedomil Goic による校訂本 Obra poética よりも、質量ともにはるかに充実した注を付すことによって読者の便宜が図られており、訳文も、原文の趣を伝えつつも平明であり読みやすい。スペイン語圏の現代詩に興味のある者のみならず、ひろく前衛文学や 20 世紀初頭の詩運動を専門とする研究者には、ぜひとも手

にとってもらいたい書物だ。

（さかた・さちこ　慶應義塾大学文学部教授）

【書評４】

寺尾隆吉『魔術的リアリズム　20 世紀のラテンアメリカ小説』（水声社、2012 年）

井尻　直志

魔術的リアリズムをキーコンセプトに 20 世紀のラテンアメリカ小説を縦横に論じている本書は、先行研究をきちんと踏まえた研究書であると同時に、ラテンアメリカ現代小説の優れた、そして分かりやすい案内書でもある。魔術的リアリズムというテーマは複雑な要素を含む難物で、そのため、それを解きほぐす作業も錯綜しがちで、私などは迷路に入り込んでしまうのであるが、著者は、明快な論理をシャープに展開して、複雑なテーマを手際よく捌いていく。そのため、複雑なはずのテーマが単純なものに思えて来て、問題を複雑にしていたのはこちらの錯綜した論理であったか、と思えてくるほどである。切れ味のいい論の展開は本書を読んで楽しんでいただくとして、要旨を簡単に記しておきたい。

本書は、第１章が「シュルレアリスムから魔術的リアリズムへ」で最終章が「文学の商業化と魔術的リアリズムの大衆化」であることからも分かるように通時的な章立てになっており、論の展開の妙は、第１章から順次読み進めることではじめて味わえるのであるが、本書の要旨をつかみ易くするため、ここでは後から前へと遡ることにする。

著者は、「現在における「魔術的リアリズム」をめぐる混乱と誤解は、直接的にはブーム以降のラテンアメリカ文学の急速すぎる商業化にある」（p.214）として、「「商業的」魔術的リアリズムと、現代世界の様相を探求する本流の魔術的リアリズムとは明確に区別する必要がある」（p.223）と言う。そして、『精霊たちの家』を「商業的」魔術的リアリズムの代表的な作品として取り上げ、「魔術的リアリズムが、非日常的視点を基盤にした共同体の構築から現実世界を見るための新しい視座を提供することはすでに論じたが、この観点から分析すれば、『精霊たちの家』は稚拙な作品としか評価しようがない」(p.212)と言う。

著者によると、「魔術的リアリズムは創作に先行して存在する理論的指針ではなく、20 世紀前半以降ラテンアメリカ作家たちが現実社会への文学的アプローチを様々な方向から模索するなかで、一部の作家に共通して指摘できる作法として、批評家が長い時間をかけて定式化したものである」(p.200)。それでは、著者にとっての本流の魔術的リアリズムとはいかなるものなのか。ホセ・ドノソとレイナルド・アレナスの作品に言及して著者は、「作者自身は魔術的リアリズムの影響を認めていないし、多くの研究者が一致して魔術的リアリズムに分類しているわけではないが、二人の作品、とりわけ『別荘』、『夏の色』、『襲撃』の三作は本書の定義、すなわち非日常的視点に基づく共同体の形成という意味での魔術的リアリズムを見事に体現している」(p.179)と言う。著者にとっての魔術的リアリズムの第一段階は、「「正常」とされる日常的視点を離れ、「異常」・「非日常的」視点から現実世界を捉え直すところ」(p.128)にあり、「第二ステップは、非日常的視点を個人レベルにとどめるのではなく、それを集団レベルに拡大し、一つの「共同体」を構築するところにある」（p.129)。そして、そのような意味での魔術的リアリズムを完成させたのが『百年の孤独』である。著者は言う。「「『百年の孤独』が知られることによって、研究者はこれに先行する同傾向の作品をより明確に整理し直

すことができた。アストゥリアスやカルペンティエール、ルルフォをガルシア・マルケスの「先駆」と位置づけることで、それまで漠然としていた魔術的リアリズムの本質がはっきり見えて来たのである」(p.126)

それでは、著者の言う魔術的リアリズムが形を取り始めるのはいつ頃か。それについて著者は、『ペドロ・パラモ』に焦点をあてながら、「1950年代半ば以降、次第に「非理性的」・「非合理的」視点からの語りを採用する作家が現れ始める。視点の変化は単なる遊戯ではなく、作家たちの政治批判・社会改革志向と根底で結びついていた。(中略) アレオラも (中略) 社会の矛盾を暴き出す手段として、意識的に非理性的視点を創作に取り込んでいた」(p.85)と述べている。したがって、アストゥリアスとカルペンティエールの作品は、「魔術的リアリズムの出発点は、西欧的科学主義・合理主義の視点を離れ、非合理的・非西欧的な視点から現実世界全体を再構築する試みにある」(p.61)として、魔術的リアリズムの原型に位置づけられるものの、視点の処理などに未だ問題があるため、著者の言う魔術的リアリズムの範疇には含まれず、また、この二人の作家が影響を受けたシュルレアリスムと本流の魔術的リアリズムとの関係については、「ラテンアメリカに大きな文化的変革を引き起こし、魔術的リアリズム誕生への道標となったのは、アヴァンギャルドが先導した価値観の刷新、非西欧文化への新たな視点の確立」(p.20)だが、「現在では、ガブリエル・ガルシア・マルケスの小説作品に代表される魔術的リアリズムは、シュルレアリスムの遠縁ぐらいに位置づけるのが妥当だろう」(p.19)と結論される。

さて、本書の魅力は明晰判明な論理の展開だけではない。むしろ、各作品の語りの分析に本書の真価があると言える。著者は、語り手と視点が魔術的リアリズムの重要な要素であるとくり返し述べて、様々な作品の語りを詳細に分析しているが、細部の分析を作品全体の解釈と批評につなげる著者の手際は見事である。最後に、少し首を傾げた点を記しておく。それは、作者と語り手の概念とロシア・フォルマリズムの「異化」の概念に関する著者の理解であるが、あるいは、私の誤読かも知れない。

(いじり・なおし　関西外国語大学教授)

【書評5】

セサル・アイラ『わたしの物語』(柳原孝敦訳、松籟社、2012年)

松本　健二

スペイン語圏に日本の芥川賞受賞作のような小説があり得るだろうか。直木賞受賞作なら山のようにあるだろうが、中編の「いわゆる純文学」となると数が限られてくるような気がしないではない。少なくともラテンアメリカでは、若手を育てる文芸誌のような場が多くないこともあり、習作時代は短編で勝負して各種の小規模な賞に応募、アンソロジーで名を売り、そのうちスペインの大きな賞で日の目を浴びるのを待つというパターンが多いように思われる。評価の高い小説家は概して大長編を書くタイプか小器用に短編を書くタイプか (あるいはその両方を兼ねるか) に分かれ、それ以外の文学活動での評価を求めるとなれば、詩など受容範囲の限定されるマイナージャンルに移行せねばならない。

そんな中にあって、評価が極めて難しい荒削りの奇妙な中編小説だけを全世界に向けて書き続けている稀有な作家が、アルゼンチンのセサル・アイラとメキシコのマリオ・ベジャテ

ィンである。日本で言ういわゆる純文学をスペイン語小説で追及すると結果的にそれはアヴァンギャルド、すなわち小説的な物語性の欠如・実験性・文体への過度のこだわりなどを特徴とせざるを得ない。

本作『わたしの物語』も最初は小説家の分身と思しき語り手による回顧風私小説として読み進めたくなるが、その期待は早々に裏切られる。というより、小説を読みなれた者の目からすれば「もう半分まで読み進めたのにこの物語的停滞と瑣事への異常なこだわりは何なのだ…」という憤りすら覚える文章が延々と続き、それでも最後まで読んでしまうのがなぜなのか、私にとってアイラはいまだによく分からない謎の魅力を秘めた作家である。筋立てはあるにはあるが、どうでもいいイメージで立ち止まり、それを「えっ、そっちに行く？」と問いかけたくなるほど意外というか想定外の方向へ長々と引き延ばしていく。気障に表現すればシュルレアリスムの散文風なのだが、ひょっとして思いつくままに書いて手を加えず出版してるだけ？と思わせる節もあり、現に訳者解説を読むとアイラは＜一瞬の思いつきから書き始めて、確たるプランももたずに書き進む（p.152）＞らしい。確たるプランくらいはもったほうがいいのでは？と心配してしまうが、そういう小説でも日本の純文学では「みずみずしい感性」とか「文から漂う不思議な粘着感」といった評価を与える寛大さがあるわけで、こうした人を食ったスペイン語小説にも同じような評価の言葉を読み手として与えていくのも一興であろう。

ベジャティンには自己言及性と身体損傷という大きなテーマがどの小説にも一貫して流れているが、思いつきの作家アイラは毎回違った風合いの作品を書いているようである。訳者にとっても出版社にとっても、こうした平易な読解を拒むような実験小説を刊行するのは勇気がいるとは思うが、アイラが他にどんな思いつきをしたのか気になっている日本の読者のためにも、ぜひその他の主要作品の紹介も期待したいところである。

（まつもと・けんじ　大阪大学大学院言語文化研究科准教授）

【書評６】

ホセ・デ・エスプロンセーダ『サラマンカの学生』（佐竹謙一訳、岩波文庫、2012 年）

木下　登

スペイン・ロマン主義文学は、ドイツ、イギリス、フランスなどに比べるとかなり遅れて導入され、そうした国々の詩人たちの影響を少なからず受けた。詩に限っていえば、そうした中でも自由な世界を描き出そうとする詩人たち独自の詩風が浮き彫りにされ、特に前期ロマン主義のエスプロンセーダや後期ロマン主義のベッケル、女流詩人カストロの詩は評価が高い。そういう意味では、早期にベッケルやカストロの邦訳が日の目を見たことも頷けるが、いかんせん日本語の文体が時代にそぐわなくなったためか、近年、訳者を変えて新たに刊行された。一方、エスプロンセーダの何篇かの詩は随分前に雑誌に発表されており、『サラマンカの学生』も大島正氏の訳で『現代詩研究』に連載された。とりわけ連載のほうは文語体で訳されているためにわかりづらい部分があったことと、今では読者にほとんど顧みられることがないということもあって、今回、現代風の新訳でそれも誰もが手に取りやすい文庫本として刊行された。

愛と死をテーマとした、サラマンカを舞台とするこの 19 世紀の中篇詩は、男女の情念の激

しさもさることながら、物語の約半分が霊界を舞台とするという独特な世界である。また主人公ドン・フェリックスは「第二のドン・フアン」としてドン・フアン伝説を踏襲するものの、死後の世界に入るや、ドン・フアン伝説から飛び出てしまうという、作者エスプロンセーダならではの技法が散見される。こうした他国のロマン主義とはひと味ちがう『サラマンカの学生』の醍醐味を、文庫本で味わえるようになったことを考えると、今回の新訳は重要な意義を持つものといえる。

くしくも今年は慶長遣欧使節がスペインを訪れてから 400 年目にあたり、皇太子殿下がサラマンカをご訪問になられたばかりである。

学問の殿堂として歴史に燦然と輝く街ではあるが、「サラマンカ」を題名にとる作品はさほど多くはない。私ごとになるが、「サラマンカ」の地名に初めてふれたのは、大島正氏による夏季集中講義のなかだったと記憶している。先生はその頃すでに『サラマンカの学生』を訳出する準備をしておられたのであろうか…。今では知る由もないが、確かなことは、あれから長い年月が流れて、「サラマンカ」という地名がわが国において確たる地歩を築きつつあることだ。

新訳『サラマンカの学生』は、表題の作品に加えて、6篇の抒情詩『夜に捧ぐ―ロマンセ―』、『海賊の歌』、『物乞い』、『死刑囚』、『星よ』そして『乱痴気騒ぎのハリファへ』を併せて収録している。

（きのした・のぼる　南山大学教授）

【書評７】

小阪知弘『ガルシア・ロルカと三島由紀夫　二十世紀　二つの伝説』（国書刊行会、2013 年）

清水　憲男

比較に関して２冊の書物が学生時代の私に衝撃を与えた。学部時代に読んだ中村元の『比較思想論』。当時の私にどこまで読み込めたかは怪しいが、比較を介して初めて見えてくるものが少なくないことを強く教えられた。独創だと思い込んでいたものが、比較することで、そうではないことに気づかされ、共通すると思っていたものが相違を見せ、双方が鮮明になることが稀ではない。

もう一冊は大学院時代に読んだ Claudio Guillén の *Literature as System*(1971)。中村とは異質の比較論だった。深い学識と鋭い感性とが相和した時、原作がこれほどまでに生々しい輝きを発するのに驚嘆した。その後、Guillén は *Entre lo uno y lo diverso* (2005)で比較文学の新たな地平を描く。Calderón の *La vida es sueño* と仏陀説話の相関を論じた A. Farinelli (1916)などを比較文学の範としてきたむきには、Guillén の諸論考は鮮烈だ。

以上の「前置き」は本書の位置づけを計るためだ。hispanófilo をもって知られる三島の作品群を小阪氏は精緻に読み込み、比較文学の妥当性を確認するかのように、ロルカとの緻密な照合を手探りで進める。著者が論証の彼方に置く指標は、三島とロルカという二大個性を、しかと把捉したいという徹底的に素朴な願いだ。本書の魅力は、ここに収斂する。奇を衒っただけの比較などではない。

本書はサラマンカ大学に提出された博士論文の日本語版だが、単なる翻訳ではない。折しも評者は同大学の招聘を受けて本論文の審査員の末席を汚したが、他の審査員と同じく、少々

厳しい指摘をさせていただいた箇所は謙虚かつ克明に再検討され、学位論文を確実に深化させている。

Guillén が指摘するように、スペインにおける比較文学は米国やフランスと比べて大きく出遅れた。小阪氏は日本人研究者として、そこに一つの楔を、そして日本におけるスペイン学に一つの布石を打ったと言って過言ではない。中村は半世紀以上昔に「フランスの東洋学は盛んであるが、好事家の骨董いじりといった感じが強い」と糾弾したが、少壮の研究者・小阪氏の仕事は、「好事家」のそれを大きく越えたものである。なお及ばずながら評者も三島に心酔した一人として、いつか小阪氏が三島とロルカと R. ラディゲを三つ巴に論じ、私の蒙を啓いてくださったらと勝手な期待をいだいている。

（しみず・のりお　早稲田大学文学学術院教授）

【書評８】

マルセリーノ・アヒース・ビリャベルデ『聖なるものをめぐる哲学　ミルチャ・エリアーデ』
（平田渡訳、関西大学出版部、2013 年）

田尻　陽一

現代フランスの哲学者ポール・ルクールの薫陶をうけた、若きスペイン人研究者による、稀代の宗教史家にして現象学者、哲学者にして小説家の、ミルチャ・エリアーデ（1907 ブカレスト～86 シカゴ）の中心思想と方法論をめぐるエッセイである。

「演劇とは他者に扮することである」と演劇論の授業で教え、「儀礼とは人が神に扮することから始まった」と演劇史で論じている評者にとって、「聖なるもの」をめぐる思索はライフワークでもある。いつか『スペインの聖なる母、日本の聖なる子どもたち』という論考をまとめてみたいと思っているが、この研究で、フレーザーやターナーと並んでエリアーデにはお世話になっている。スペイン人がエリアーデについて書いていると知り、興味津々、本書のページを紐解いた。

著者アヒース・ビリャベルデは現在、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学哲学部教授（1963 ラショ、ポンテベドラ州～　）である。まず驚いたのは、聖なるものをめぐる文献に関して、プラトンからレヴィ・ストロースに至るまで、いや、エリアーデの弟子たちにまで言及していることだ。ちなみに、エリアーデを除いて、言及されている研究者の一部を挙げてみると、その博覧強記は一目瞭然である。

ヘラクレイトス、ヘシオドス、タレス、アリストテレス、クリアーノ、ペッタツォーニ、グスグプタ、キタガワ、ヘーゲル、フッサール、ハイデガー、カッシーラー、クザーヌス、オットー、マックス・ミュラー、ディルタイ、アルタイザー、ファン・デル・レーウ、ラスムッセン、マリノフスキー、フロイト、ユング、カーク、タイラー、フレイザー、デュルケーム、デュメジル、リクール、カイヨワ、リーズ、オルテガ、ウナムーノ、バリーニャス……。

この春、亡くなった文化人類学者、山口昌男の言葉を借りれば、ほとんど「思想史としての学問史」（『本の神話学』中央公論社　1977）の体裁を帯びていると言ってさし支えないであろう。

それにしても驚かされるのは、著者がこの研究書をひっさげて、新進の学者としてヨーロ

ッパの哲学界にデビューしたとき、まだ28歳だったということだ。てっきり博士論文だと思っていたが、博士論文は、翌年、『哲学的なディスクール　ポール・ルクールの著作からの分析』と題して完成させている。こちらは、提出先のサンティアゴ・デ・コンポステーラ大学から特別賞をうけて表彰されている。そうした点を見ただけでも、著者が只ものではないと思わせるにじゅうぶんである。

著者の見解に従えば、エリアーデの方法論的な姿勢は、ふたつの要点、つまり、聖なるものの弁証法に向けられた注意と、宗教的なシンボリズムが果たす役割に絞って、はっきりと書かれている。特に第3章「シンボルと神話における聖なるもの」は見事にエリアーデの思想を要約している。

装訂は「訳者自装」だそうだ。15 世紀フランスの写本『七月の暦　時禱書の零葉』から採られた、野いちごと獅子の細密画の美しさには驚嘆するばかりだ。それにもまして、取り上げられた研究者一人一人について訳者が訳注をつけている。驚愕すべき研究書の翻訳である。

（たじり・よういち　関西外国語大学教授）

【書評9】

María Jesús Zamora Calvo (editora), *Japón y España: Acercamientos y Desencuentros (siglos XVI y XVII)*, SATORI, Gijón, 2012.

成田　瑞穂

慶長遣欧使節団（1613 年）の派遣から 400 年を記念し、2013 年6月から 2014 年7月まで日本とスペインの両国で "Año dual de España en Japón y de Japón en España"と題されたイベントが進められている。文化事業をはじめ、幅広い分野での日本・スペインの相互理解の促進と新たな展望を拓く契機とすることを目的としているという。その先駆けとして昨年 2012 年5月、マドリード自治大学哲文学部の研究チームの主催する国際研究学会「Japón y el Siglo de Oro español: relaciones e influencias 日本と西班牙黄金世紀ーその交流と影響の諸相ー」がマドリードで開催された。本書はその際におこなわれた口頭発表を中心にまとめられたものである。

本書は東谷穎人氏による序文、María Jesús Zamora Calvo 氏の趣旨解説に続き、川村やよい氏による歴史背景の概説、さらに日本、スペイン両国の多様な分野の研究者が執筆した 18 本の論文で構成されている。掲載論文の内容は、スペイン・ポルトガル影響下で培われた日本の「南蛮美術」とイベリア半島におけるその受容の考察（V. David Almazán Tomás 氏）、宣教師や商人たちによる記録文書、翻訳文書の調査研究（Elena Barlés Báguena 氏、折井善果氏、Emilio Sola 氏、Carla Tronu Montané 氏）、スペイン黄金世紀と元禄文化の代表的演劇作品の比較（Jaime Fernández 氏、Fernando Cid Lucas 氏、Javier Rubiera 氏）、日本文学のスペイン語翻訳における成果と問題点（福嶌教隆氏）、南蛮文化との邂逅によって育まれた建築思想の研究（原陽子氏）、Baltasar Gracián の著作にみる同時代のスペイン人と日本人の国民性・美意識の共通点の検討（東谷穎人氏）、西欧文法との対比による日本語研究の特徴（三好準之助氏、Santiago U. Sánchez Jiménez 氏）、日本におけるエラスムスとセルバンテス研究（野村竜仁氏）、文学作品にみられる日本とスペイン語圏の関係性の考察（José Pazó Espinoza 氏，Luis Miguel Vicente García 氏）、図像学的な見地からのアジアとヨーロッパの

比較検討（高木香世子氏、María Jesús Zamora Calvo 氏）など、多岐にわたる。

日本への鉄砲伝来（1543 年）から始まる、日本とイベリア半島との濃密な交流の時代を本書では「Siglo Ibérico en Japón 日本におけるイベリア世紀」とみなし、ポルトガルのスペインからの分離（1640 年）までおよそ百年間続くとしている。そして日本、スペインのどちらもが 17 世紀以降、世界からの孤立を体験したものの、その交流の影響は現在まで続くとみなすことができるという。本書掲載のいずれの論稿も、この 16 世紀、17 世紀における日本とスペインの交流とその相互影響を通底するテーマとしている。さらにそれぞれの分野での最新の研究動向も明らかにする本書の学際的な試みは、同時代に成熟期を迎えた日本、スペイン両国の文化の有り様を再発見し、相互理解を促進するための広範な視野を提示しているといえるだろう。

（なりた・みずほ　神戸市外国語大学准教授）

【海外学会報告１】

XIX　Sociedad Española de Literatura General y Comparada

今井　洋子

2012 年９月 19 日から 21 日までスペイン、サラマンカ大学で開催された SELGyC（Sociedad Española de Literatura General y Comparada スペイン一般文学・比較文学学会）の第 19 回大会に参加した。SELGyC は 1977 年に比較文学と文学理論の研究を推進するために創設された学会で、現在 580 名の会員を擁し、２年毎にスペイン各地で学会を開催している。今回のシンポジウムでは「文学と映画」「誘惑の文化」「日本の存在」という三つのテーマが設定されていた。「日本の存在」というテーマは昨年の東日本大震災のニュースに衝撃を受けたスペインの文学研究者たちが、サラマンカ大学の「日西センター（Centro Cultural Hispano-japonés）」の尽力で、日本にエールを送ろうと決めたものであった。

学会での発表は 150 を超え、６つの会場に分かれて午前９時から午後６時半までびっしりとあり、その後講演会や映画の上演もある盛り沢山なものであった。日本をテーマにしたものとしては、翻訳家 Carlos Rubio 氏、日西センター所長の Ovidi Carbonell を中心にした「日本を翻訳する一世界の両極に文学の橋を架けつつ」というパネルディスカッションと最終日の特別ゲストの作家、逢坂剛氏の「私にとってのスペイン」という講演、裏千家の茶道家による茶道の披露があった。

「日本の存在」に関する発表は全部で 25 あり、そのうち日本人研究者によるものは６つであった。私は「漱石とコルタサルの作品の女性人物について」というテーマで発表した。直接の影響関係はない日本の作家、漱石とアルゼンチンの作家、コルタサルの作品の女性登場人物の類似の謎、彼女たちが結局抹殺された原因を分析した。彼らの愛した英文学のキーツやロセッティが描いたギリシャ神話の“キルケ”を源泉とする“ファム・ファタル”的女性人物たちが殺された原因は、彼女たちが誘惑者であったことより、自分自身の意志を持ち、男性共同体に挑もうとしたことによると結論づけた。

他の日本人の研究発表としては、神戸市外大の福嶌教隆先生の「役割の表現：スペイン語と日本語の対照研究」、サラマンカ大学、日西センターの加藤さやか先生の「日本人のメンタリティにおける無常観についての考察」、大阪大学の岡本淳子先生の「野田秀樹の戯曲、The

Bee における普遍性」、関西外大の豊原ひとみ先生の「戦時文学：スペイン内戦下の共和派のロマンセロと日本の 20 世紀の戦中の京大俳句」、静岡大学の森なおか先生の「日本における『血の婚礼』の受容について」があった。

スペイン人の若い研究者による「谷崎潤一郎の『卍』の五回の映画化における違い」、「近松とシェイクスピアの構造」、「映画『さくらん』における女性性の仮面」「アントニオ・マチャドにおける俳句」、「ホセ・フアン・タブラダと浮世絵」など興味深いテーマがあった。

パネルディスカッションでも論じられ、逢坂剛氏が、最終講演でも自分の作品が一冊も翻訳されていないということをユーモアをまじえながら訴えられように、日本文学のスペイン語翻訳がまだまだ十分ではなく、村上春樹などの人気のある作家を除いては日本を代表する作家ですら読むのが難しいというのが変わらぬ課題である。

（いまい・ようこ　京都産業大学教授）

【海外学会報告　2】

24to CONGRESO SOBRE ESPAÑOL EN LOS EE. UU. Y EL 9no CONGRESO SOBRE EL ESPAÑOL EN CONTACTO CON OTRAS LENGUAS

Analía Vitale

Como consecuencia de la llegada de los inmigrantes hispanohablantes en los años noventa, estamos viendo actualmente el paso de sus hijos por las universidades japonesas, como nos retrata la Revista mercado latino. Este fenómeno, en tierras americanas, forma parte del paisaje multicultural y multilingüe desde hace varias décadas atrás. Este es precisamente uno de los temas que se trata en el 24to Congreso sobre español en los EE. UU. y el 9no Congreso sobre el español en contacto con otras lenguas, celebrado en la Universidad de Texas Pan American, situada en la frontera entre EE. UU. y México, y con la participación de más de 100 propuestas y 160 asistentes.

Desde hace unos 30 años, surge este evento como respuesta a las limitaciones teóricas ligadas a la lingüística y a la sociolingüística presentadas en otros congresos de mayor renombre y peso académico. De allí que reúna trabajos provenientes de esas áreas, pero con especial interés en temas relacionados con el idioma español en los EE. UU. y el español en contacto. Es un congreso de académicos comprometidos por lo general, con el sentido de igualdad, justicia y derecho a mantener y a desarrollar la lengua materna. Participan tanto estudiantes de posgrado, investigadores jóvenes e innovadores así como expertos en estas áreas de estudio, como en esta oportunidad, lo fueron Ana María Carvalho, Jennifer Leeman, Rena Torres Cacoullos, Barbara Bullock, Jacqueline Almeida Toribio, y Kim Potowski. El congreso está abierto a nuevas tendencias liberales, con énfasis en las minorías y sus derechos lingüísticos, y a la educación bilingüe.

En los primeros congresos dominaron los análisis sobre la poblaciones migrantes de mayor presencia en territorio americano, como los mexicanoamericanos, cubanos y puertorriqueños para luego expandirse a otros grupos sociales. Las ponencias se distribuyen en áreas temáticas, tales como ideologías, actitudes y elecciones lingüísticas;

contacto, mantenimiento y cambio de idiomas; lengua e identidad; préstamos léxicos; cambio de códigos; pragmática y análisis del discurso; fonología; pedagogía para L2, políticas educativas, etc.

Una de las áreas de importancia es la Enseñanza del español como lengua de herencia, enfocada a hispanos criados en los Estados Unidos. El objetivo común es alcanzar mayores niveles de alfabetismo, atendiendo a las particulares necesidades pedagógicas y lingüísticas. Se propone así revisar la conexión entre lengua y poder, y fomentar una conciencia crítica a la hora de enseñarlo. Los estudiantes hispanos siempre han percibido al español como socialmente devaluado por ser lengua de inmigrantes y de menor valor académico, debido a la fuerte tradición de enseñar la variedad estándar y de prestigio. El desafío es entonces, recuperar el valor de la lengua materna entre estos bilingües, reconociendo sus diferentes registros, el lugar social y geográfico de su uso, con mayor conocimiento sobre las variedades culturales y lingüísticas de las diferentes comunidades hispanas en EE. UU.

(Universidad Kwansei Gakuin)

【海外学会報告３】

XLVIII CONGRESO INTERNACIONAL DE LA AEPE

Jaca, del 21 al 26 de julio de 2013

Fernando Blanco Cendón

Bajo el lema "El español en la era digital" se celebró en Jaca (Aragón, España) el XLVIII Congreso Internacional de la AEPE (Asociación Europea de Profesores de Español) en el que participaron 120 profesores de 26 países.

Las tres conferencias plenarias versaron sobre el lema del Congreso. En la sesión inaugural, "Las nuevas tecnologías en la enseñanza de E/LE", el Dr. Robert Blake (Universidad de California en Davis y Academia de la Lengua en USA) habló detalladamente sobre el uso y aprovechamiento de las TICs en el aula. La Dra.Teresa Gómez Trueba (Catedrática de Literatura de la Universidad de Valladolid) disertó sobre la aplicación formal de las nuevas tecnologías en la novela en su conferencia titulada "Las nuevas tecnologías en la última novela española: fabulaciones apocalípticas y estéticas de corta y pega". Finalmente la sesión de clausura "Creación literaria y nuevas tecnologías" corrió a cargo del escritor Vicente Luis Mora, quien con su experiencia personal puso el contrapunto práctico.

Muchos de los ponentes presentaron comunicaciones en torno al lema del Congreso, abundando en el uso de las TICs como instrumento didáctico, resaltando que los *profesores analógicos* siempre estaremos un punto por detrás de los *nativos digitales*. Esta vez incluso las Editoriales participantes incorporaron sus presentaciones dentro del Congreso a modo de talleres didácticos.

Pero el lema no agotó todas las comunicaciones. Como es costumbre, muchas versaron

sobre literatura, cultura y pensamiento (por ejemplo mi ponencia titulada "Unamuno vs. Raku"). Amén de experiencias didácticas en el aula E/LE sin relación directa con las TICs.

(Universidad Kansai Gaidai)

【国内の学会案内】

XXVI Congreso CANELA 2014
CONVOCATORIA

El XXVI Congreso de la Confederación Académica Nipona, Española y Latinoamericana CANELA se celebrará el 10 y 11 de mayo de 2014 en el International Communication Center de la Universidad Kansai Gaidai.

El congreso tiene tres secciones:

- Literatura
- Pensamiento e Historia
- Metodología de la enseñanza del español como lengua extranjera (ELE)

CANELA convoca a todos sus miembros en Japón y simpatizantes (no socios) tanto en Japón como en el extranjero a presentar propuestas de conferencia (plenaria, de hasta una hora de duración) o de ponencia (reunión por grupos, de hasta media hora de duración) que se enmarquen dentro de los estudios de cada sección o de las áreas de interés de la organización en su conjunto, en especial sobre algún aspecto de los vínculos entre Japón, España y Latinoamérica.

Las propuestas de los interesados deberán remitirse en lengua española en documento MS Word y contener:

- Título de la conferencia o ponencia, especificando si se trata de esta o aquella
- Resumen de entre 500 y 1000 palabras en el caso de una conferencia; resumen de entre 300 y 500 palabras en el caso de una ponencia
- Nombre del autor, dirección de correo electrónico y afiliación

Los miembros de CANELA harán llegar sus propuestas por correo electrónico a sus jefes de sección respectivos:

JEFA DE LA SECCIÓN LITERATURA	Profa. Chikako Murata	literatura @ canela.org.es

JEFE DE LA SECCIÓN PENSAMIENTO E HISTORIA	Prof. Bernardo (Astigueta) Nakajima	**pensamiento @ canela.org.es**
JEFA DE LA SECCIÓN METODOLOGÍA	Profa. María Fernández	**metodologia @ canela.org.es**

Los simpatizantes que residan en Japón o en el extranjero harán lo mismo, pero al Comité Organizador del Congreso:

COMITÉ ORGANIZADOR	Profa. Gisele Fernández	**secretaria @ canela.org.es**

La fecha tope de presentación de las propuestas es el 25 de agosto de 2013 (inclusive), a las 24:00 horas, hora de Japón (JST).

Tanto en el caso de las conferencias como en el de las ponencias, se dará prioridad en la selección a las propuestas de los miembros de CANELA. La organización se reserva el derecho de no seleccionar ninguna propuesta en particular.

CANELA no se compromete a financiar los gastos de transporte u otros a los participantes. En principio, los gastos han de ser financiados por los participantes. Los seleccionados que no sean miembros ordinarios de CANELA deberán pagar el equivalente a la cuota anual de los miembros (7.000 yenes) para participar en el congreso, lo cual les da derecho a publicar sus trabajos en la revista de la asociación *Cuadernos Canela*, o bien pagar la cuota de oyente (1.000 yenes), pero sin derecho a publicación. Los simpatizantes residentes en el extranjero que hayan sido seleccionados para dar una conferencia (plenaria) deberán abonar el equivalente a la cuota anual para poder participar, es decir, no podrán acogerse a la modalidad de pago de los oyentes. El pago ha de efectuarse dentro de las cuatro semanas posteriores al anuncio de aceptación de las propuestas por medios que serán comunicados en su momento.

Los resultados se darán a conocer a los interesados de manera individual a finales de septiembre de 2013.

Cualquier consulta se puede efectuar escribiendo al Comité Organizador.

El Comité Organizador
XXVI Congreso de CANELA 2014
canela.org.es

【新刊案内】

【2012年～13年　書籍情報】

（スペイン、ラテンアメリカ関係の書籍、すべて掲載できていません。発行月の間違いはお許しください。太字の書籍は書評で取り上げました）

2012年4月

○フロレンティーノ・ロダオ、深澤安博ほか訳『フランコと大日本帝国』晶文社、A5判576頁

○フェルナンド・バジェホ、久野量一訳『崖っぷち』、松籟社、四六判212頁

5月

○フアン・マルセー、稲本健二訳『ロリータ・クラブでラヴソング』現代企画室、四六判348頁

○エベリオ・ロセーロ、八重樫勝彦、八重樫由貴子訳『無慈悲な昼食』作品社、四六半208頁

6月

○フリオ・コルタサル、木村榮一訳『遊戯の終わり』岩波書店（岩波文庫）

○加藤薫『骸骨の聖母サンタ・ムエルテ　現代メキシコのスピリチュアル・アート』新評論、A5判180頁

○フアーナ・カストロ、伊高浩昭訳『カストロ家の真実　CIAに協力した妹が語るフィデルとラウール』中央公論新社、四六半496頁

○島田泉、篠田謙一編『インカ帝国　研究のフロンティア』東海大学出版会（国立科学博物館叢書⑫）B5判438頁

7月

○セサル・アイラ、柳原孝敦訳『わたしの物語』松籟社、四六判 212頁

○フリオ・コルタサル、木村榮一訳『秘密の武器』岩波書店（岩波文庫）

○マリア・カステジャノス、佐野直子、敦賀公子『たちあがる言語・ナワトル語　エルサルバドルにおける言語復興運動』グローバル社会をあるく研究会（発売：新泉社）、A5判224頁

○いも類振興会編『ジャガイモ辞典』（財）いも類振興会、B5判416頁

○青山和夫『マヤ文明　密林に栄えた石器文化』岩波書店（岩波新書）新書判240頁

8月

○フリオ・リャマサーレス、木村榮一訳『無声映画のシーン』ヴィレッジブックス、四六判264頁

○カルロス・ゴンサレス、湯川カナ訳『うちの子どうして食べてくれないの？』ジャパンマシニスト社、四六判368頁

○アナ・マリア・マトゥテ、大西亮訳『北西の祭典』現代企画室、四六判200頁

○エマニュエル・ルパージュ、大西愛子訳『ムチャチョ　ある少年の革命』飛鳥新社、A4判176頁

○木村榮一『翻訳に遊ぶ』岩波書店、四六判228頁

9月

○ロベルト・ボラーニョ、野谷文昭、内田兆史、久野量一訳『2666』白水社、A5版868頁

○カルロス・ルイス・サフォン、木村裕美訳『天使のゲーム　上・下』集英社（集英社文庫）、

文庫判上・440 頁、下・384 頁
○オラシオ・キローガ、甕由己夫訳『野生の蜜』国書刊行会、A5 判 349 頁
○萩尾生、吉田浩美『現代バスクを知るための 50 章』明石書店、四六判 376 頁
10 月
○寺尾隆吉『魔術的リアリズム』水声社、四六判 240 頁
○丸山久美『修道院のお菓子　スペイン修道女のレシピ』地球丸、B5 判 96 頁
○レオナルド・ファチオ、上野洋子訳『メッシ評伝　情熱を秘めて』東邦出版、四六判 192 頁
11 月
○バルガス・リョサ、木村榮一訳『アンデスのリトゥーマ』岩波書店、四六判 386 頁
○磯崎　新『気になるガウディ』新潮社、B5 判変型 126 頁
○オラシオ・カステジャーノス・モヤ、細野　豊訳『無分別』白水社、四六判 164 頁
○アレックス・ロビラ、フランセスク・ミラージェス、田内志文、青砥直子訳『TREASURE MAP 成功への大航海』アチーブメント出版、四六判 216 頁
○ホセ・ラモン・マリニョ・フェロ、下山静香訳、川成　洋監修『サンティアゴ巡礼の歴史伝説と奇蹟』 原書房、四六判 326 頁
○フェルナンド・モンテロ、ラファエル・ガラン、宮崎真紀訳『タフガイの仕事術　ハードな職場でもの自分を殺さない方法』阪急コミュニケーションズ、四六判 288 頁
○ホルヘ・フランコ、田村さと子訳『パライソ・トラベル』河出書房新社、四六変形判 304 頁
○井上雄彦『pepita 井上雄彦 meets ガウディ』日経 BP 社、A4 変型判 108 頁
12 月
○エスプロンセーダ、佐竹謙一訳『サラマンカの学生　他六篇』岩波書店（岩波文庫）文庫版 267 頁
2013 年 1 月
○マリア・ウェレニケ、宇野和美訳『パパとわたし』光村教育図書、A4 変型判 31 頁
○さかぐち　とおる『メキシコ―世界遺産と音楽舞踊をめぐる旅』柘植書房新社、A5 判 180 頁
○小阪智弘『ガルシア・ロルカと三島由紀夫―二十世紀　二つの伝説』国書刊行会、四六判 381 頁
2 月
○西川和子『ギター前史　ビウエラ七人衆　スペイン宮廷楽士物語』彩流社、四六判 255 頁
○大髙保二郎、松原典子『もっと知りたいエル・グレコ　生涯と作品』東京美術、B5 判 72 頁
○キルメン・ウリベ、金子奈美訳『ビルバオ―ニューヨーク―ビルバオ』白水社、四六判 232 頁
○フアン・パブロ・ビジャロボス、難波幸子訳『巣窟の祭典』作品社、四六版、264 頁
○佐竹謙一『スペイン文学案内』、岩波書店（岩波文庫）
3 月
○アルベルト・ルイ＝サンチェス、斎藤文子訳『空気の名前』白水社、四六判 142 頁
○旦　敬介『旅立つ理由』岩波書店、四六判 206 頁

○小澤典代『キュートな図案の宝庫　かわいい手仕事を訪ねて　メキシコの刺繍』誠文堂新光社、247×185　128 頁
○濱田滋郎『スペイン音楽のたのしみ　気質，風土，歴史が織り成す多彩な世界への“誘い”（オルフェ・ライブラリー』音楽之友社、四六判 280 頁
○クルーサ　絵：モニカ・ドペルト、岡野富茂子・岡野恭介訳『道はみんなのもの』さ・え・ら書房、255×230　48 頁
○フェリクス・J・パルマ、宮﨑真紀訳『宙(そら)の地図（上・下)』早川書房（ハヤカワ文庫)、文庫判　上巻 480 頁，下巻 464 頁
○ビセンテ・ウイドブロ、鼓　宗　訳『マニフェスト―ダダからクレアシオニスムへ―』関西大学出版部、A 5 版、186 頁
○マルセリーノ・アヒース・ビリャベルデ、平田渡訳『聖なるものをめぐる哲学　ミルチャ・エリアーデ』関西大学出版部、四六判 352 頁

4 月
○セルヒオ・ラミレス、寺尾隆吉訳『ただ影だけ―フィクションのエル・ドラード』水声社、四六判 328 頁
○伊熊よし子『伊熊よし子のおいしい音楽案内　パリに魅せられ，グラナダに酔う』PHP 研究所、新書判 248 頁
○クラウディア・ルエダ、宇野和美訳『やだよ』西村書店、A4 変型判 38 頁
○マリオ・バルガス＝リョサ、西村英一郎訳『継母礼賛』中央公論新社（中公文庫)、文庫判 192 頁
○マリオ・バルガス＝リョサ、西村英一郎訳『ドン・リゴベルトの手帖』中央公論社（中公文庫)、文庫版 432 頁

5 月
○蟻川明男『なるほど世界地名辞典 5　中米・南アメリカ』大月書店、A4 変型判 40 頁
○ホセ・バラオナ・ビニェス、『ピンチョス 360°　all about finger food』柴田書店、A4 変型判 160 頁
○田澤　耕『レアルとバルサ　怨念と確執のルーツ　スペイン・サッカー興亡史』中央公論新社（中公新書ラクレ）新書判 224 頁

『HISPANICA』編集委員会より

『HISPANICA』58 号の原稿を募集しています。

論文・研究ノート・書評を投稿規定に従い、2014 年 3 月 1 日から 31 日までに、ご投稿ください。

〔送付先〕
〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10　ｱｰﾊﾞﾝ大塚 3F
（株）ガリレオ　学会業務情報化センター 東京オフィス内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

ようやく「会報」20号ができあがりました。寄稿していただいた先生方に心より感謝申し上げます。「会報」の構成について、多々ご意見があろうかと思います。皆様からのご意見を取り入れ、少しでも学会の「会報」にふさわしいものにしたいと願っております。よろしくご意見のほど、お願いいたします。

今年は日西友好400周年に当たります。この予告記事を集めることができなかったことは、編集子の怠慢としか申しようがございません。次号に記念行事の報告ができればと願っています。記念行事にかかわった方々からのご報告をお待ちしております。

いつものように、本誌『会報』に掲載する「海外で開催された国際学会の案内と報告」原稿を募集しています。また、スペイン語圏に関する新刊書を発行されましたら、広報委員の田尻までご連絡ください。（書評に取り上げるかどうかは、編集委員会にお任せください。）

（広報担当理事：田尻陽一）